

## カージャール朝期作成のイマーム・レザー廟に関するワクフ関連史料をめぐって

杉山 隆一

### Waqf-related Sources on the Imām Rizā Shrine during the Qajarid Period

SUGIYAMA, Ryuichi

Imām Rizā, the eighth Imām of the Twelver Imamate Shiites, died in 818 at present-day Mashhad, northeastern city of the Islamic Republic of Iran. His mausoleum, erected soon after his death, was gradually expanded, mainly by *waqf* endowments, under the patronage of the royal families and ruling elites of various dynasties governing the Iranian region. In particular, due to the shiization of the Iranian region after the Safavid dynasty, founded in the 16th century, this Imamate mausoleum began a full-scale development with many endowments. However, this mausoleum had suffered significant damage because of the Uzbek inversion at the end of the 16th century, Nādir Shāh's confiscation of waqf properties, and the domestic instabilities at Khurāsān district in the first half of the Qajar period. These political disruptions severely destabilized this mausoleum administration. After this disorder, the mausoleum conducted surveys of its waqf properties, revenues, and expenditures, and recorded the results in a manuscript to reestablish the mausoleum's administration. In particular, surveys conducted after the 1850s, when the local rebellion in the Khurāsān area was suppressed, and several manuscripts collecting information indispensable for the mausoleum's operations were compiled.

This paper aims to introduce waqf-related historical sources for the Imām Rizā mausoleum that were compiled in the late Qajar period. The first part surveys the characteristics of the mausoleum's waqf management from the 16th to 19th centuries, focusing on the involvements of dynasties in its management and the importance of *marwqūfāt-i muṭlaqa* (waqf property without conditions on the use of its revenue). The latter part introduces five historical sources on waqf properties compiled after the 1850s. These sources can be divided into two categories: a corpus of transcriptions of waqf documents and a collection of data on the mausoleum's waqf properties and its staff. This section describes the background and main features of its completion.

**Keywords:** Imām Rizā Mausoleum, Mashhad, management of a Shiite mausoleum, waqf, Qajar dynasty

キーワード: イマーム・レザー廟, マッシュハド, シーア派廟運営, ワクフ, カージャール朝



はじめに

1. レザー廟のワクフ財管理の歴史的特徴
2. カージャール朝期レザー廟ワクフ関連史料の紹介
  - 2.1 *Kitābcha-'i Mawqūfāt-i Āstān-i Quds*
  - 2.2 *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk*
  - 2.3 *Vaqfnāma 'hā wa Asnād-i Āstān-i Quds-i*

### はじめに

818年に没した12イマーム・シーア派第8代イマーム、レザー‘Ali b. Mūsā al-Riḍā (Imām Riḍā)は、その死没地となった現在のイラン・イスラーム共和国北東部のマシュハドにその墓廟が建設された。レザー廟は、被葬者であるレザー自身が12イマーム・シーア派のイマームであったがゆえ、イラン地域におけるレザー崇敬の高揚、シーア派化政策推進の中でその存在の重要性が高まり、現在に至るまで多数のワクフ寄進の受益対象となり、発展を遂げてきた。廟はその過程の中で各王朝の庇護を受けながら多数のワクフ財を集め、病院や孤児院、図書館などの附設施設を備えた複合施設化が進むと共に、現在ではシーア派を国教としたイラン・イスラーム共和国の中で最も重要な聖廟として位置づけられている<sup>1)</sup>。また、廟の所在地であった当初小村でしかなかった場所も都市化が進められ、現在では都市マシュハドも人口約300万人を抱えるイラン第2の都市となるまでに成長した。

同廟の前近代における歴史研究の動向としては、近世に至るまでの概説提示の段階を経て、近年では現地の研究者によるレザー廟図

*Raḥavī*

- 2.4 *Asnād wa Vaqfnāma-'i Āstān-i Quds*
- 2.5 *Kitābcha-'i Mawqūfāt-i Āstān-i Quds-i Raḥavī*

2.6 *Firdaws al-Ṭavārikh*

おわりに：史料としての可能性について

書館所蔵の文書を用いた研究が進みつつある。但し、その力点は廟運営のための組織構造や、附設の病院、学校といった複合施設の運営などの解明に置かれており<sup>2)</sup>、ワクフそのものに焦点を当てた研究は多くはない。同廟のワクフに関わる研究の障壁としては、史料の残存状況といった問題もさることながら、同廟のワクフ部門 *Idāra-'i mawqūfāt-i Āstān-i Quds-i Raḥavī* やワクフ慈善機構 *Sāzmān-i Awqāf va Umūr-i Khayriya* の管理下にあるワクフ及びその関連文書に関しては、廟附設の研究機関に属する研究者ですら閲覧許可が下りないことにある<sup>3)</sup>。しかし、19世紀までのワクフおよび関連の文書の一部に関しては文書の写しを多数収録した写本の形態で残されている。また後述するようにスィヤーク体で同廟のワクフ財をはじめとした運営に関わる情報を集めた写本も存在する。現在では少なくとも現地の研究者もワクフ文書に関してはこうした写本史料に依拠して研究を進めている。但し、同廟関連の文書史料を収録した写本史料に関しては、一部についての解題があるに過ぎず、さらには現地の研究者の間でもその所在が把握されていない写本も存在する。

本稿では、まずレザー廟のワクフ財管理の

- 1) 現在レザー廟は最高指導者が1990年に発布した裁決 (*mujavviz*) に則り、コムのマースーム廟、シーラーズのシャー・チャラグ廟、レイのアブドルアズィーム廟と共にイラン・イスラーム共和国の最高指導者の直接の管理下に置かれており、運営状況に関する一般への開示義務を有さないなどの特権を持つ [Furūzish 1386Kh: 8-10]。
- 2) 近年の現地での研究動向のまとめとして、杉山 [2018a] がある。
- 3) レザー廟に関しては、図書館の文書部門が所蔵する主にサファヴィー朝後期以降の関連文書は閲覧可能である。なお、ワクフ部門が管轄する文書の閲覧が許可されない件については、2019年11月に筆者がレザー廟図書館の研究者に質問した際の解答に基づいている。

歴史的な特徴について、サファヴィー朝期以降のワクフ管財人 (mutavalli)<sup>4)</sup> のワクフに関わる職務とワクフ財のあり方などの点から概観する。その上で、19世紀に作成されたレザー廟のワクフ寄進に関連して作成された写本史料に関して主要なものを紹介し、その特徴や研究の可能性の提示を行いたい。レザー廟のワクフ研究に関して上記のような史料的な制約がある中で、こうした写本史料の紹介と研究への利用の可能性の検討は、今後研究を進めていく上で有益な作業と考える次第である。

### 1. レザー廟のワクフ財管理の歴史的特徴

現地にて出版されたレザー廟の歴史について網羅的に扱った研究書としては Kāviyāniyān [1354Kh], Mu'tamin [1348Kh], Sayyidi [1375Kh], 'Uṭāridi [1371Kh] などが代表的なものとされる。それぞれに程度の違いはあるが、廟の歴史、建築・複合施設の発展、ワクフ管財人をはじめとした廟のスタッフと組織構造、ワクフ財とその管理方法などに関する説明を含んでいる。同廟のワクフに関する総合的な研究としては Mawlavī [1353Kh] がある。同書は廟が所蔵する文書の網羅的な調査の成果として1979年のイラン・イスラーム革命直前に完成した七巻本の名著で、同廟のワクフに関する詳細な研究と言われるが、革命後に出版計画が頓挫し刊行には至らなかった。そのタイプ打ちの原稿はレザー廟図書館に現在所蔵されているが、利用は容易ではない<sup>5)</sup>。

レザー廟の組織は、アルダビールのサ

フィー廟、コムのマアスーム廟といった地域における他の主要な聖廟と同様に、サファヴィー朝期以降はその時々王朝から任命されるワクフ管財人を頂点とした構造を有していた。同廟におけるワクフ管財人職<sup>6)</sup>は、サファヴィー朝後期からアフシャール朝末期まではサイイドのレザー家<sup>7)</sup>、マルアシー家が占め、カージャール朝期には王家が任命した官僚が就任する形になる。基本的に一名のみが就任される形であったが、サファヴィー朝シャー・タフマースプの支配期には同廟に二種のワクフ管財人職、すなわち慣習のワクフ管財人職 (tawliyat-i sunnatī) と義務のワクフ管財人職 (tawliyat-i wājibī) が配置されていた [Mu'tamin 1348Kh.: 227] [守川 1999: 180] [Sawhāniyān & Naqdi 1397Kh: 20-21]。この点について 'Ālam-ārā に以下のような記述がある。

「慣習の (sunnatī)」という表現は、ソユルガル、そして王家の部門 (sarkār-i khāṣṣa-'i sharīfa) が宴席に必要としている物品、従者たち、教師たち、職務を有する者たち、サイイド関連の部局 (idārāt-i sādāt), 職人と知識人 ('amalan' va fazlan'), 貧者といった部門の消費のために与えるものを指す。なぜなら、天国を住まいとするハーカーン様 (Ḥāzrat-i Khāqān-i jannat-ashiyān) が [それらを] 使用する権利をもっていたがゆえに、それを「慣習の」と名付けたのである。そして、支出が定められているワクフと誓願からの利益 (ḥāṣil-i awqāf<sup>8)</sup> va nuzūrāt) は、ワクフ設定者たちの [定めた] 諸条件

- 
- 4) カージャール朝期になるとレザー廟のワクフ管財人には Mutavalli-bāshī の呼称も用いられるようになる [Morikawa & Werner 2017: 8 n.6].
- 5) 筆者はそのうち、ワクフ寄進の年代別リスト等を掲載した第7巻目のみの複写を入手している。
- 6) 同廟における歴代のワクフ管財人に関する研究はいくつか存在するが、最新のものとしては Sawhāniyān & Naqdi [1397Kh].
- 7) マッシュハドを本拠としていたレザー家に関する近現代の歴史研究として、Werner [2021] がある。同研究はサファヴィー朝後期における同家内部でのワクフ管財人の継承についての考察も含む。
- 8) 当該の箇所は校訂本では awqāt となっているが、石版本 ['Ālam-ārā 2: 111] に従い awqāf と読む。

に従って (ba mawjib-i shurūt-i vāqifayn) 用いられねばならないが、これを「義務の (vājibī)」と称している。[*Ālam-ārā* 1: 149] (文中の括弧は本稿筆者による)。

この記述に基づけば、王家が廟のために定めた支出を扱うのが慣習のワクフ管財人職となり、支出等の諸条件が定められたワクフや誓願の担当が義務のワクフ管財人職となる。同廟にはシャー・タフマースブとその後継となる君主をワクフ管財人に指定したワクフも存在しており [Ṭalā'ī 1397Kh: 137], このワクフも前者の管轄であった可能性も考えられる。ワクフ管財人の職務がこの2つに分離されたのは974/1567年のことであり、その後981/1574年にも双方の任命の事例が確認できる [*Khulāṣat*: 460–461, 561]。上記以外にこの二種のワクフ管財人が任命された記録は知りうる限り見当たらない。

レザー廟ではマアスーメ廟、サフィー廟、レイのアブドルアズィーム廟と同様に旧ワクフ財 (mawqūfāt-i qadim) と新ワクフ財 (mawqūfāt-i jadid) という二種類のワクフが設定されていたと考えられる。アブドルアズィーム廟に関する研究成果に基づけば、前者は16世紀初頭以前に設定されたワクフ設定者が存在するワクフ財、後者は王朝が管理するワクフ財を指す [Kondo 2015: 47–51]。また、本論集第2部第4論文「サファヴィー朝期シャイフ・サフィー廟の管財人とワクフ財」(近藤論文)によればワクフ管財人に関しても、マアスーメ廟、サフィー廟では旧ワクフ財、新ワクフ財それぞれの担当が置かれるという2名体制であり、双方の管理は異なっていた。レザー廟のワクフ関連文書においても、残存しているファルマーン [Mudarrisī Ṭabāṭabā'ī 1356Kh: 155–157] や、廟に与えられたソユルガル (suyūrghāl) に関する旧・新の区別 [Ḥasanābādī 1386Kh]

から、恐らくは上記聖廟と同様に二種のワクフ財が存在していたことが垣間見える [杉山 2020: 145–146]。本論集第2部第4論文(近藤論文)は、行政便覧を手掛かりに王朝が介入し得ない法的なワクフ財には廟のワクフ管財人であっても原則干渉が不可能なため、ワクフ管財人が君主によるワクフを管理する一名のみが置かれていたが、王朝の祖廟であり教団時代からサファヴィー家が管理していたサフィー廟は例外であると指摘する。レザー廟でも先述の通り王家関連の支出と法的ワクフは分かれていたため、上記の通りシャー・タフマースブの治世において一時的には二種のワクフ管財人が任命されていた。その後においても旧・新のワクフ財の区分の存在が僅かながらにだが垣間見えることから、ワクフ管財人は一名のみだったが、双方のワクフの運営が別個に行われることは当然意識されていたと言えるだろう。但し、レザー廟については現在のところ他の関連史料にも、ワクフ財の旧・新の区別については上記の記述以外には見出すことができない。

旧・新のワクフ財の区別が曖昧になっている点については、1588–1598年の間に起きたマールワラーアンナフルのウズベク系王朝シャイバーン朝による都市マシュハドの占領時にレザー廟も略奪され、多くの文書が消失したこと [Iḥtishām Kaviyāniyān 1354Kh: 548] が関連している可能性もあろう。サファヴィー朝前期以前のワクフに関しては、文書が残る最古のワクフとも言われるサファヴィー朝前期931/1525年のアティーク・アリー・ムンシー 'Atiq 'Ali Munshi<sup>9)</sup> など、その謄写版が現在にまで伝えられているものもある。Ṭalā'ī [1397Kh: 137] は同王朝期のレザー廟を受益対象としたワクフのリストを掲載するが、うちシャー・タフマースブ期におけるワクフは9件と多くはない<sup>10)</sup>。同王朝期以降も、レザー廟はアフシャル朝初代

9) このワクフ文書に関しては翻刻が出版されている [Anjabinizhād 1388Kh: 41–55]

10) Ṭalā'ī [1397Kh] は Mawlavī [1353Kh] などの二次文献も参照しているが、現在可能な限り ↗

君主ナーディル・シャー Nadir Shāh による全土的なワクフ接收をはじめ、カージャール朝期におけるホラーサーン地方でのサーラールの乱 fitna-'i Salār (1847–1850)<sup>11)</sup> や、1960年代の白色革命の影響を受け何度も運営上の混乱を経験することになる。こうした混乱が廟に所蔵されたワクフ関連史料の残存状況、ならびにワクフ財の管理に大きな影響を与えてきたと推測される。

但し、ワクフ寄進時の文書が消失などによって不明となったが、以後に作成された関連文書の存在によって廟が受益対象であることが確認できるワクフ財については、廟を受益対象とした正当なワクフ財として扱うことが可能になる。その場合は寄進時の文書が失われているためにワクフ財からの収益の用途が特定不能な点が問題となる。こうしたワクフ財は無条件ワクフ財 (mawqūfāt-i muṭlaqa)<sup>12)</sup> と呼ばれ、収益の用途指定がなされているワクフ財 (mawqūfāt-i khāṣṣa) と区別されている [Mu'tamin 1348Kh: 339–340] [Iḥtishām Kaviyāniyān 1354Kh: 548–577]。レザー廟ではサファヴィー朝前期以前のワクフに関してこの無条件ワクフ財に設定されたケースが確認可能である。現在最古のワクフ財として知られるのが、イルハン朝のガザン・ハーン Ghāzān Khān によっ

て 699/1299–1300 年にワクフされたワクフ財であるマシュハド近郊のファルハードジルド Farhādjird なる村落だが、このワクフは寄進時の文書が上述のサファヴィー朝期のウズベク勢力にマシュハド占領時に消失してしまったと伝えられる [Mawlavī 1347Kh: 127]。以後の関連文書に基づいて廟のワクフ財であることの証明は可能だが、受益対象が不明であるためにこの無条件ワクフに設定されている形になっている [Mawlavī 1347Kh: 120]<sup>13)</sup>。

また、サファヴィー朝末期からは、ワクフ設定時に当初から廟における受益対象を設定しない寄進の事例も見られるようになり<sup>14)</sup>、この無条件ワクフ財が時を経るごとに徐々に増えていく。後述する同王朝期 1274/1858 年作成のレザー廟のワクフ調査史料 *Ṭūmār-i 'Azud al-Mulk* ('Azud), および 1285/1869 年作成の *Kitābcha-'i Mawqūfāt-i Āstān-i Quds-i Razāwī* (KM) は、同廟のワクフ財についてのリスト ['Azud MKh: 12–91] [KM: 2a–18b] の中では、ワクフ財につき双方の種別が記載されている<sup>15)</sup>。こうしたワクフ関連の情報を集めた史料の中に無条件ワクフ財という種別が記されるようになったこと自体、このワクフ財の運営上における重要性の高まりを示すものであろう。Morikawa & Werner

↗ 網羅的にサファヴィー朝期のワクフの情報を集めた研究である。同研究はシャー・アッパースからスルターン・フサインの治世の間のワクフについて 60 件を挙げている。

- 11) 1835 年にホラーサーン知事に就任したアッラーヤール・ハーン Allāhyār Khān Āṣaf al-Dawla は、当時のカージャール朝君主ムハンマド・シャー Muḥammad Shāh が病に伏せていることを好機と捉え、中央に対して対決姿勢を見せる。その後、同地の知事職を継承した息子のハサン・ハーン・サーラール Ḥasan Khān Salār がクルド、トルクメン勢力などを従えて 1847 年に大規模な反乱を起こす。マシュハドならびに周辺のホラーサーンの諸都市が彼の支配下に入ったため、中央からアミール・キャビール Amīr Kabīr により討伐軍が派遣され、反乱は泥沼化し長期化する。レザー廟も彼の軍隊の略奪で多くの損害を被ったと言われる。この反乱は最終的に 1850 年の彼の殺害まで継続する [Sayyidi 1375Kh: 320–329]。
- 12) 本稿筆者は以前この mawqūfāt-i muṭlaqa について「自由ワクフ」と訳出していた (例えば、[杉山 2020] など) が、本文中の訳語がより相応しいと考えたため変更する。
- 13) この村落ファルハードジルドは、'Azud MKh [38–39], 'Azud AR [80] のワクフ財のリストのその名が見える。但し、前者ではこの村落が位置するサルジャーム Sarjām なる地域のワクフ財がすべて「無条件 muṭlaqa」たる説明が冒頭に付されるが、後者には欠落している。
- 14) Ṭalā'ī [1397Kh: 144] は、Mawlavī の研究を典拠として 1131/1718–1719 年のハーッジ・マンスール・サルキヤルダ Ḥāj Mansūr Sarkarda のワクフがこの無条件ワクフであると指摘している。
- 15) KM は後述するように *Ṭūmār-i 'Azud al-Mulk* と内容が一部重複している。

[2017: 20] はこの無条件ワクフ財について、その収益の用途の決定権がワクフ管財人に委ねられる点で 19 世紀以降非常に重要となっていたと指摘する。後述するがこの無条件ワクフ財からの収益は、主に廟の建物の修繕費、従者ら廟官吏の給金などに充当されており、収益の用途を指定したワクフ文書に記載のない支出を賄っていたと考えられる。

なお、ワクフ管財人に関しては、上述の通り一時的な例外を除き一名のみが任命される形になっていた。但し、サファヴィー朝シャー・スライマーンの治世以降は、ワクフ管財人代理 *Nā'ib al-Tawliya* なる職が新たに設けられる。スライマーンの治世に管財人職に任じられたミールザー・ダーウード・マルアシー *Mirzā Dāvūd Ḥusaynī Mar'ashī* (在任 1108/1696?~1133/1720) は中央の宮廷にて官職に就任していたため、息子を代理としてレザー廟に派遣したことが同職の創設の契機とされる。以降、アフシャール朝末期まではワクフ管財人不在の際にこの代理が任じられていた。カージャール朝期には常に同職が置かれていたわけではないが、任命された場合には廟での実務の多くが代理に委ねられ、従者 (*khādim*) や職員に対する命令の承認、給与の支払い、賃貸に出したワクフ財の監督、財務関連文書の管理、参詣者・貧者への財政支援、賜衣・心づけの下賜<sup>16)</sup>、宗教儀礼の挙行など多岐に渡っていたとされる [Sūzanchī *Kāshānī* 1399Kh: 593-594]。

## 2. カージャール朝期レザー廟ワクフ 関連史料の紹介

レザー廟のワクフ関連の写本史料を紹介する先行研究の主要なものとして、*Afshār* [1364Kh: 840], '*Uṭāridī* [1371Kh: 634-645] が挙げられる。後者は多数の史料を挙げているが、その一部は所在が分かっておらず、参照可能な状態にはない<sup>17)</sup>。

レザー廟のワクフに関する調査は、サファヴィー朝期シャー・アッパースの治世の 1010~1011/1601~1603 年にはすでに行われていたとの指摘があるが、その結果としての史料は現存しない<sup>18)</sup>。レザー廟関連のワクフ関係の文書や情報を集めた史料のうち、現存している最古のものはアフシャール朝期の 1160/1747 年に作成された *Ṭūmār-i 'Alīshahī* ('*Alīshahī*) である。その後、特にカージャール朝に入ってから末期に至るまで、本稿で紹介するようなワクフならびに廟運営関連の情報を集めた写本史料が作成されていくことになる。こうした写本史料については、2 つに分類可能であると考え。ひとつは同廟を受益対象としたワクフ文書および関連文書の謄写を集めた「集成」、もうひとつは廟の職員やワクフ財 (場合によっては動産も含む) の状況をスィヤーク体で記したものになる。後者の史料群については「卷子 (巻物)」*ṭūmār* の形態を取るものがある。この「卷子」と称する史料のうち、重要性が高いのは先述の *Ṭūmār-i 'Alīshahī* と本稿で扱う *Ṭūmār-i*

16) カージャール朝期のレザー廟からの賜衣の下賜については Werner [2016: 115-134] を参照のこと。同論文では当時のレザー廟による独自の勅令の発給も指摘されている。さらに *Mu'tamin* [1348Kh: 327-330] によれば、廟は職員らにラカブも与えており、王朝の宮廷が保持していたような権限を有していたことになる。なお、アフシャール朝期の同廟の運営組織構造については、当時の王朝の宮廷に極めてよく似ていたことが確認可能である [杉山 2020]。

17) 例えば、'*Uṭāridī* [1371Kh: 642-643] に挙げられている *Kūtābcha-i Mukhtār Beg* は、1282/1865-1866 年にレザー廟の職員であった史料表題にその名がみえる *ムフタル・ベグ Mukhtār Beg* が作成したワクフ財のリストならびに廟の支出についてスィヤーク体でまとめた史料とされる。本史料はマウラウィー氏の所蔵とされるが、筆者が 2019 年に廟図書館の研究者に聞き取りを行ったところ、現在その史料の所在は不明とのことであった。

18) この部分に関しては、イラーヘ・マフブーブ *Ilāha Mahbāb* 氏の研究を典拠にした *Ṭalā'ī* [1397Kh: 138 n.7] に基づいている。

‘*Azud al-Mulk*」である。また上述の KM は「卷子」の形態ではないがスィヤーク体で廟の動産・不動産のワクフ財、職員などの情報を網羅的に集めた史料になる。なお、ワクフ文書の謄写や関連文書を集めた史料のごく簡単な紹介として、先述の Afshār [1364Kh: 840] がある。但し、Afshār が紹介する 6 点の史料には、KM や、1301–1303/1883–1886 年に三巻本で刊行された石版本のマシュハド史 *Maṭla‘ al-Shams* (MS), 1317/1899 年完成の *Āthār al-Raḡaviya* (AR) が含まれており、文書を謄写した「集成」は 3 点となる。

こうしたワクフ文書ならびに関連文書の謄写の「集成」、ならびに主要な「卷子」は、いずれもカージャール朝後期、すなわち 1850~60 年代に集中して作成されている点にある。但し、「集成」に分類可能な *Kitābcha‘-i Mawqūfāt-i Āstān-i Quds* (AQ), *Vaqfnāma-hā va Asnād-i Āstān-i Quds-i Raḡavī* (VM), *Asnād va Vaqfnāma‘-i Āstān-i Quds* (DT) には序文がなく、冒頭からすぐに文書の謄写がはじまり、作成の動機を窺い知ることができない。当時は廟運営上の混乱が続き、ホラーサーン地方を中心に起きた上述のサーラルの反乱によって、レザー廟も略奪を受け大きな損害を受けていた。加えて、ナーセロディーン・シャー Nāṣir al-Din Shāh の治世の初頭には廟のワクフ財が不法占拠されており、そのワクフ財を回復する勅命 (farmān) が発布されている<sup>19)</sup>。彼の治世初期までに生じていたこうした混乱を

打開し、廟運営を適切に再開するためには、廟に対して寄進されたワクフ財や、廟における受益対象に関してワクフ文書に基づいた情報の把握が必要であったと指摘されている [‘*Azud MKh*: 3–4]<sup>20)</sup>。こうした運営上の混乱が、この時代に集中してワクフ文書ならびに関連文書を集めた「集成」や廟のワクフ財等の情報をまとめた「卷子」が作成された背景になっていると考えられる<sup>21)</sup>。

ワクフ文書の謄写の「集成」なる写本史料において注意すべきは、当時廟が管理していたであろうワクフ文書をすべて写した網羅的な史料ではない点である。Mawlavī [1353Kh: 1–11] によれば、サファヴィー朝後期からカージャール朝崩壊時までのワクフ文書は 195 件となっている。しかし、氏の調査に見えるワクフ文書が「集成」には収録されていない点、また氏の調査から漏れているワクフ文書が「集成」の中に収録されている点も考慮しなくてはならない。また、これらの「集成」は、ワクフ文書のみを収録している訳ではなく、勅命、証書 (qabāla) などの写しも収録している場合もあるが、その点数は多くない。ワクフ寄進時の文書のみが多数収録された背景としては、同廟ではワクフ財が非常に多数に上ったため、恐らくはまずワクフ文書を筆写し、ワクフ財の名称と場所、さらに収益利用の条件の指定という基礎的な事項の確認を行うという狙いがあったのではないかと推測される。

以下、上記の Afshār [1364Kh: 840] が取

19) ナーセロディーン・シャーの治世たる 1271/1855 年に、第 3 者に不法占拠されていたホラーサーン以遠のレザー廟のワクフ財たる多くの村落・店舗などに関して、廟のワクフ財への回復を命じる勅命が発布されている [AR: 287–293]。遠隔地に所在する個々のワクフ財にいかなる問題が生じて他者の占有下に入ったかは不明だが、この時点までにワクフ財に関する大きな混乱があったことを推測させる。

20) この箇所は、校訂者による序文である。

21) 石版本として作成された AR のみ、カージャール朝最末期たる 1317/1900 年の作成となっている。この本の作成の経緯に関しても、序文の箇所に「(皇帝が) レザー廟のワクフ財の精査に本腰を入れ、… (中略) … 同廟に所蔵されているワクフ文書の写しについて、その要約を抜き出して印刷するよう命じた」[AR: 3] なる記述が見られる。本文中で取り上げる史料と同様に、廟のワクフ関連の情報収集と状況の把握のために作成されたと言える。なお、AR の著者による作成の意図については [Morikawa & Werner 2017: 14–18] を参照のこと。

り上げているレザー廟のワクフ文書と関連文書の「集成」である写本史料3点 (AQ, VM, DT), ならびにスィヤーク体で書かれた廟のワクフ財等の情報を集めた上記の2点の史料 (*Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk*, KM), およびこれまであまり取り上げられることのなかったマシュハドの都市史料 *Firdaws al-Tāvārikh* (Firdaws) 中に見える同廟のワクフ財関連の章 (第4章) の内容, 合計6点の史料を以下において紹介する。なお, 紹介は史料の成立年代順に行う。なお, すでに詳細な紹介がある AR, また MS は本稿では取り上げない<sup>22)</sup>。

## 2.1 *Kitābcha-'i Mawqūfāt-i Āstān-i Quds* : 略号 AQ

本写本はレザー廟図書館において8557番の所蔵番号を持つワクフ文書およびその関連文書の謄写の「集成」である。本稿で利用する「集成」のうち最も作成年代が古く, 1268/1851年の作成であり, 当時のワクフ管財人であったアブドルバーキー・ムナジームパーシー 'Abd al-Bāqī Munajjim Bāshī の命令で, アブドルムウミン・フサイニー 'Abd al-Mu'min al-Ḥusaynī が作成したものである [AQ: 320-321] [*'Azūd MKh*: 3]。美しいナスフ体で書かれているため, 判読は比較的容易である。葉数は158葉だが, 原則として文書と文書の間に見開きの空白の頁が挿入される体裁を採っているため, 収録文書数は58点と多くはない。その中でワクフ文書が54点とほとんどを占め, 残りは証書やフクムとなっている。なお, 各葉においては右側上部にワクフ財の名称などの文書の内容, 左側上部にワクフ対象が非常に簡潔に記入されている。この部分を見ればワクフ財やワク

フ対象を簡単に把握することができ, 便利である。

収録文書の掲載順は, 最初にシャー・アッパースによる1011/1602年の廟の墓地をワクフ財としたワクフ文書が掲載され [AQ: 1-4]<sup>23)</sup>, 次いで1259/1843年のハッジ・ムッラー・フサイン・ハブシャーニー Ḥāj Mullā Ḥusayn Khabūshānī [AQ: 7-11], その次に1097/1683年のシャー・ヴィルディー・ベク Shāh Virdī Beg によるワクフ [AQ: 13-16] となっている。シャー・アッパースのワクフ文書は他の集成でも冒頭に掲載されており, その重要性は作成当時の人々にも共有されていたと思われるが, このアッパースの文書以外の並びはDTとの間で一貫がない。2番目の文書は本写本に含まれる一番新しいワクフ文書のため, 収録年代の下限を示すために2番目に並べられた可能性も考えられる。アフシャル朝ナーディル・シャーの1145/1762年のワクフ文書も記載がある [AQ: 45-54]。ワクフ文書を時代別に分類するとサファヴィー朝32点, アフシャル朝8点, カージュール朝14点となり, サファヴィー朝のワクフ文書が半分以上を占め, ARと異なっている。AQを扱った先行研究によれば, 多くの書写間違いや, 本来ならあるべき欄外書き込みなどの省略といった問題があると指摘される [Naqdi 1399Kh-a: 299]。

このワクフ文書の集成は収録点数が最も少ない。上述の通り, 作成に当たっては何らかの意図を持って書写する文書を選択したと考えられるが, その意図は記されていない。その他の「集成」も同様である。KM [2a]の序文には, 先人たる君主やワクフ設定者たちがワクフしてきたものを登録するとの文言

22) ARには史料解題としてすでに [Morikawa & Werner 2017: 1-27] が刊行されている。MSは Afshār [1364Kh: 840] ではワクフ文書を含む史料として記載されるが, レザー廟に関しては2巻目の末尾に図書館所蔵の書籍のリストがあり [MS vol. 2: 479-500], その中に当時図書館が有していたワクフ文書のリストを掲載するに過ぎない。

23) 写本の引用頁については, 写本自体に書き込まれた頁に従い記載する。



もある。この時代に作成された「集成」については、サファヴィー朝期の古いワクフの再確認と共に、レザー廟が君主を中心とした王朝の支配層から支えられてきた点を強調する意図があったとも推測される。

## 2.2 *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk* : 略号 'Azūd MKh; 'Azūd AR

この史料は、1272/1856年にレザー廟ワクフ管財人に就任したミールザー・ムハンマド・フサイン・アズドルムルク *Mīrzā Muḥammad Ḥusayn 'Azūd al-Mulk* の命によって編纂され、「卷子」の形態で1274/1858年に完成に至ったものである。彼は1268/1851年以降に在ロシア・イラン大使館や年金ワクフ省にてキャリアを積み、その後ナーセロディーン・シャーの治世に2度ワクフ管財人に就任した人物である(1856-1861, 1865-1867)。ワクフ管財人在任中は、以下検討の対象とする *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk* の編纂の他に、廟での宗教儀礼や慈善のためのワクフや [*Anjabinizhād* 1388Kh: 268-274], 建物の修繕や整備事業の推進が伝えられる [*Yahyāyī* 1399Kh: 133-134]。

本史料の作成時期については先に言及した他の「集成」と前後しており、サーラールの乱により混乱した廟運営を立て直すために作成されたと指摘されている [*'Azūd MKh*: 3] [*Yahyāyī* 1399Kh: 133-134]。史料作成に当たっては、廟所蔵のワクフ文書ならびに関連する法廷文書、卷子類などを調べ、当時見られたワクフ財への不当な介入、不法利用を止めさせることが狙いであったとされる [*'Azūd MKh*: 12] [*'Azūd AR*: 70-71]。なお、現在レザー廟図書館に所蔵される現物は長さ9メートル、幅44センチという大部の卷子となっている [*Naqdi* 1399Kh-b: 115]。その謄写版は確認可能な限り写本 DT なら

びに AR に挿入される形で存在しており、さらに2種の校訂が存在する [*'Azūd MKh*] [*'Azūd AR*]。但し、下記で簡単に言及するように *'Azūd AR* には一部のデータの欠落が見られる一方で、原本にあった多数のウラマーによる認証 (*sijill*) が付されている。

本史料は、レザー廟のワクフ財のデータとその収益、ならびに5グループから構成される廟の聖域たるハラム空間を管理するケシク (*kishik*) の官吏の氏名に関して詳細なデータを記載している [*'Azūd MKh*: 98-119]<sup>24)</sup>。但し、*Ṭūmār-i 'Alishāhī* のようにティムール朝期にシャルフの妃ガウハル・シャード *Gawhar Shād* が廟に隣接する形で創建した自身の名を冠したモスク (ガウハル・シャード・モスク *Masjid-i Gawhar Shād*) に関する情報についての記載はない。謄写における問題としては、*'Azūd MKh* と *'Azūd AR* では違いが存在し、後者にはケシクの官吏の氏名に関するデータは掲載されていない。恐らくは後者の編纂時には不要な情報と見なされ、削除されたものと思われる。また、下記で言及する通り、一部の表現が異なるなどのケースも見られる。加えて、本史料は以下で紹介する写本 KM と重複した記述が見られるが、その点については別途説明を行う。

ワクフ財については先述の通り収益の用途が指定されたワクフ財と無条件ワクフ財といった2つの種類が存在するが、この史料では農業物件、商業物件の多くのワクフ財に関して当時における上記の種別が記されている点の特徴であると言える。物件については、ワクフ財に関する説明の中で四囲の説明ならびに「用途指定 (*khāṣṣa*)」「無条件 (*muṭlaqa*)」の語が原則として付されており、「用途指定」の場合は、受益対象に関するごく簡単な説明が付される場合もある。また同一のワクフ物件の中で「用途指定」「無

24) 本史料を利用した研究としては、職員の氏名リストを参照してレザー廟職員の中に見えるメッカ巡礼者・アタバート参詣者の割合を記し、巡礼・参詣地の「格」について検討した [守川 2006: 290-294] がある。

条件」の部分が混在している場合にも説明が記されている<sup>25)</sup>。但し、‘Azud AR ではこの説明が脱落しているケースも見られる<sup>26)</sup>。

また、商業施設のワクフ財に関する詳しい情報が記されている [‘Azud MKh: 43-70] [‘Azud AR: 87-110]。記述の形態はワクフ財の種類(店舗以外の隊商宿 khān, ティームチャ tīmcha など)でまとめられている箇所もあれば、特定のワクフ設定者ごと<sup>27)</sup>、またはパーザール単位でまとめられているケースがあり、多様である。こちらも先述の通り「用途指定」「無条件」の区別が記載されている。加えて、市域内の店舗については、土地のみが廟のワクフ財であり、店舗を建設した人物が地代 haqq al-arz を廟に支払う形態の店舗 [‘Azud MKh: 50] が多数存在していたことが窺える。ワクフ財である商業施設のリストには、業種や物件の現況についての記載があり、ワクフ財としてのマシュハド市域内の業種ごとの店舗数などについても知ることが可能である。

### 2.3 *Vaqfnāma-hā wa Asnād-i Āstān-i Quds-i Razavi* : 略号 VM

本写本は現在レザー廟の管理下にあるテヘランのマレク図書館に1137番の所蔵番号で収蔵されている。作成の年代は1276/1859年であるとされるが、作成者については不明である。ナスフ体ならびにシキヤスタ・タアリーク体で記されている。葉数は137葉、

収録文書は76点であるが、一部分の要約や、部分のみを書写した文書も含む。本史料もワクフ文書ではない文書も一部収録している。なお、収録文書のリストが写本冒頭と前半部の2箇所が付されているが、この部分は恐らく後で付されたもののように見える。写本後部 [VM: 234] 以降になると、書体はかなり崩れたシキヤスタ・タアリーク体になり判読が難しくなり、さらにこの部分の文書はリストには含まれていない。恐らくこの部分も後に追加で書写された部分ではないかと推測される。

本写本においても、冒頭の文書はAQ同様にシャー・アッパースによる1602年のワクフ文書 [VM: 1-4] であり、次いで1259/1843年のアーカー・サイイド・サディーク [VM: 5-8]、その次に1097/1683年のシャー・ウィルディー・ベクによるワクフ [VM: 9-12] と続く。その後、ワクフ文書のリストの挿入がある [VM: 16-18]<sup>28)</sup>。収録順で13点目である1210/1796年のムハンマド・ザマーン・フサイニー Muḥammad Zamān Ḥusaynī のワクフ文書 [VM: 58-59] [AQ: 75-77] まではAQと掲載順が同一である。冒頭の3つの文書の後に記される収録文書のリスト [VM: 16-18] だが、これはVM [233] までにおける「無条件」「用途指定」のワクフ文書の掲載葉を示すリストとなっている。さらにリストの末尾には「レザー廟の国外のワクフ財 mawqūfāt-i

25) 例えば、ワクフ財であるミフラーブ・ハーンなる枝村 mazra‘a-i Mihrāb Khān は、1dāng分が無条件ワクフ財となっている [‘Azud MKh: 15]。同じ箇所では用途指定の箇所について「用途について別途記載」とあるが、AR記載の謄写には5dāng分に関してマクタブハーネ maktabkhāna が受益対象であることが記されている [‘Azud AR: 72]

26) 本史料の地域別にワクフ財の説明が進められ、最初はホラーサーン、マシュハドから開始される。その冒頭部のアルダマ地区 bulūk-i Ardama のアーレフィー枝村 mazra‘a-i ‘Arīfi, ガイビー枝村 mazra‘a-i Ghaybī に関しては [‘Azud MKh: 12] には「無条件」である旨記載があるが、ARの校訂の該当部 [‘Azud AR: 71] にはその記載がない。

27) 例えば、‘Azud MKh [43-44] ではこの隊商宿やティームチャなどがまとめて記載されている。後者については、1854年からワクフ管財人を務めたファズルッラー・ワズィール・ニザーム・ヌーリー Faẓlallāh Vazīr-i Nizām Nūrī の大規模ワクフで寄進された店舗 [‘Azud Mkh: 44] などが事例として挙げられる。

28) 本写本には上部に頁番号が記入されているが、このリストの部分には欠落している。文書リストの前の最後の頁番号が15となっているため、この頁番号は本稿筆者が仮に付したものである。

khārīja-i Sarkār-i fayz-āthār」なる項目があり、現在のアフガニスタンにワクフ財が位置する 1078/1667 年のアッパース・クリー・ハーン 'Abbās Qulī Khān<sup>29)</sup> らのワクフ文書が挙げられている [VM: 203-210]。近代を迎えて国外に所在するワクフ財管理の特殊性を意識せざるを得なくなったことの反映であろう。

収録されているワクフ文書は、サファヴィー朝期 36 点、アフシャール朝期 12 点、カージャール朝期 25 点となり、AQ と同様にサファヴィー朝期の文書が多い。但し、書体が変わる [VM: 234] 以降末尾までは圧倒的にカージャール朝期の文書が多数収録されていると共に、廟所蔵のその他のワクフ文書の簡単な要約も含まれる。AQ とは異なり特に同時代であるカージャール朝期のワクフの情報を多く集めようとした姿勢が窺える。

#### 2.4 *Asnād va Vaqfnāma-i Āstān-i Quds* : 略号 DT

本写本はテヘラン大学中央図書館に 2978 番の所蔵番号で収蔵されている。作成年代は資料中に明記されていないものの、収録文書の中の最も新しい日付のものが *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk* が作成された 1274/1858 年であるため、それ以降の作成と考えられる。作成者の情報については見当たらない。葉数は 244 葉であり、ナスフ体が用いられている。基本的には AQ、VM 同様にワクフ文書の「集成」であるが、上述の *Ṭūmār-i 'Alīshahī*, *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk* の謄写 [DT: 49-100, 248-294] を含んでいる点が特徴であろう。その他、証書などの文書の写しも収めている。2 種の「卷子」を含め収録文書数は 100 点上り、文書の「集成」としては収録点数が最

も多い写本となっている。また、先頭から DT [174] くらいまでは下の部分に欠損があり、一部の葉の下部にある欄外書き込みは完全には判読できない。

冒頭は例によって AQ、VM と同様に 1602 年のシャー・アッパースのワクフ文書 [DT: 4-8] からはじまるが、続く文書はシャー・アッパースによる別のワクフである 1023/1614 年の文書 [DT: 8-10]、その後はシャー・タフマースブをワクフ管財人に指定した 957/1550 年のワクフ文書 [DT: 12-31]<sup>30)</sup>、さらにナーディル・シャーのワクフ文書 [DT: 32-44] が続く。先行して作成された「集成」以上に歴史上の諸王朝の君主の廟開発への関与を冒頭にて強調する構成になっていると言える。収録されているワクフ文書は、サファヴィー朝期 34 点、アフシャール朝期 11 点、カージャール朝期 16 点と VM より数は少なく、カージャール朝期の文書はあまり多くはない。他方、本史料は証書等の文書をも多く含んでいるのが一つの特徴である。例えば、DT [163-239] にはサファヴィー朝期のクルド系武将ギャンジ・アリー・ハーン Ganj 'Ali Khān のワクフに関連する文書など、カージャール朝期に作成された多くの証書等が連続して収録されており、同廟のワクフ財の変遷の解明に活用できる可能性もあろう。

#### 2.5 *Kitābcha-i Mawqūfāt-i Āstān-i Quds-i Raḡavī* : 略号 KM

テヘランのイスラーム議会図書館所蔵に所蔵される上記の表題を持つ写本は、ナーセロディーン・シャーの命により、1285/1869 年に当時のワクフ管財人であったムハンマド・マジド・アルムルク・スィー

29) シャー・スライマーン期のマシュハドのベグレルベギ beglerbegi。廟に隣接するアッパース・クリー・ハーン・マドラサの創設者としても知られ、1078/1667 年のワクフは同マドラサを主な受益対象としながら、一部については廟をも受益対象としている [AQ: 297-312] [AR: 272-280]。

30) 本文中にワクフ設定者の名前は示されていないが、Ṭalā'i [1397Kh: 136] に従えば、ワクフ設定者はアブルファトフ・フサイニー Abū al-Faṭḥ Ḥusaynī なる人物である。

ナキー Muḥammad Majd al-Mulk Sīnakī が作成したものである [KM: 1b-2a]。写本の題名は元から付されていたものではなく、写本カタログ作成時に便宜的に付されたものである。本史料作成の意図としては、不動産および様々な貴重品から構成される動産からなるワクフ財についてその一部が遺失してしまったがゆえに、精査の上登記する必要があると述べられている [KM: 2a]。但し、序文には言及が無いが、以下に記す通り廟官吏や複合施設の情報も本史料には含まれる。序文以外はすべてスィヤーク体で記された廟の不動産・動産からなるワクフ財と官吏、複合組織に関する情報を集めたものとなっている。

作成年は序文の中に 1285/1869 年と明記されている [KM: 2a]。しかし、冒頭部に記載される不動産のワクフ財の詳細な情報 [KM: 2a-18b] は、上記の 1858 年作成の *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk* が伝える不動産のワクフ財の情報と、一部の単語や表現の有無程度の違いを除きほぼ同一である。以降の部分は、他に類を見ない動産のワクフ財の極めて詳細なリスト [KM: 19b-82a] が続く。一例を示せば、宝石 (javāhir), カンテラ (qanādil), 燭台 (sham'dān), 参詣祈願書 (ziyārat-nāma), 時計 (sā'at), 武器 (ālāt va asbāb-i ḥarb), 図書館所蔵の写本リスト, ファルマーンなどをはじめとした文書, 中国製食器 (zarf-i chīnī), ザリーフの覆い (zarīhpūsh)<sup>31</sup>, 絨毯 (qālī) など、当時の廟がワクフ財として有していた多様な物品がリスト化されて並べられている。図書館の写本リスト [KM: 32b-72a] に関しては、コーラン, ハディース, 法学など分野別に収録されており、さらにワクフ文書のリストが不動産たるワクフ財の名称が表題となる形で記載されている。所蔵写本リストは後代に作成された MS [vol.

2 479-500], Firdaws [M: 427-472] にも収録されており、その先鞭をつけたものと言えよう。

さらに廟の運営組織に関して、廟内の高位の官吏, ケシクにて従事している職員の氏名に関する情報を記載している [KM: 91b-99a]。ワクフ管財人についての記載はないが、ケシクの官吏のみを記載していた *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk* とは異なり、ナーズィル (nāzīr), サドル (ṣadr), 印璽官 (muhrdār) 以下主要な官吏の氏名と職名から始まり、ウラマー, 廟の各所に配置されたコーラン読誦者たち (ḥuffāz), 病院の職員, ケシクの成員 (従者 khādīm・絨毯係 farrāsh・扉番 darbān・靴番 kafshbān, 礼拝の告時人 mu'azzin), 参詣祈願書読み (ziyāratnāma-khān) といった職員の氏名が挙げられている。但し、最後の参詣祈願書読みについては、当時は第 5 ケシクまで存在していたはずだが、第 3 ケシクの人員までしか掲載されておらず、第 4 ケシク以降の参詣祈願書読みおよび他の複合組織の職員のリストはない。また、職員のリストには *Ṭūmār-i 'Alīshāhī* のように俸給に関するデータはなく、加えて実際の廟の組織の運営や必要経費といった情報に関しては記載がない。廟の官吏に関する情報については、前年の 1284/1867 年にホラーサーンを行幸したナーセロディーン・シャーの旅記に挿入されている廟の高官のリスト [*Rūznāma*: 195-197] に見える職員の情報を補完する形でさらに正確を期したものとなっており、この行幸時に得た情報に基づいて作成されたと推測される。

本史料は、他の史料には見られないカージャール朝期の同廟の動産のワクフ財、ならびに職員に関する網羅的な情報を提供してくれる点でその価値は高いと言える。但し、ワ

31) 墓廟では多くの場合、棺の周囲に木製もしくは金属製のザリーフ (zarīh, 格子) が置かれるが、時にそのザリーフを覆うために絹などで織られ、コーランの章句などを入れた織物が被せられることがある。このザリーフを覆う織物を「ザリーフの覆い zarīhpūsh」と呼ぶ [Muḥsinī 1399Kh: 91-95]。

クフ財については、少なくとも不動産に関しては *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk* とほぼ同一の内容であり、動産のデータや廟の組織や人員に関する記載については、本史料が作成された1869年以前に収集された情報をも含んでいる。ゆえに調査年代の異なったデータが混在した史料であると考えられ、この点には注意が必要であろう。

## 2.6 *Firdaws al-Ṭavārikh* : 略号 *Firdaws*

1301/1883年に完成した上記の史料は、レザー廟が建設されて以降の同廟とマシュハドの都市史、およびウラマー列伝、イマーム・レザーが著したとされる医学書 *Ṭibb al-Ridā* のペルシア語による注釈、レザー廟のワクフ財リストを収録したマシュハドとレザー廟の総合的叙述史料になる。著者のナウルーズ・アリー・ファーズィル・バスターミー *Nawrūz 'Alī Fāzil Bastāmī* は、1227/1812年にバスターム *Bastām* に生まれ、幼い頃にマシュハドに移住し、当地の著名な宗教学院であるナッワーブ・マドラサ *Madrasa-i Navvāb* で学問の研鑽を積み、教鞭をも取った人物である。存命中にはアタバート参詣、メッカ巡礼も果たし、多くの著作を残した学識高いウラマーとして知られる<sup>32)</sup>。都市史の部分は執筆時のマシュハドに関する歴史認識を表すものとして有用な史料であると同時に、カージャール朝期の部分については同時代史料としても有用である。カージャール朝期のワクフ管財人のうち、著名な人物に関する列伝も含んでいる。

この史料の第4章 [*Firdaws M*: 411-444]<sup>33)</sup> が「レザー廟での(収益の)使用に関して、諸王、諸大臣、臣下、被造物が定め、現在は導きの礎たるあの集い(=レザー廟)の職

員たちの専有下にある現行のワクフ財とサダカに関する記述 (*dar bayān-i mawqūfāt-i va ṣadaqāt-i jāriya ki dar maṣārif-i rawza-i Raṣaviya, salātin va vuzarā' va 'amma-i ri'āyā va barāyā qarār farmūda-and va ḥāl dar taṣarruf-i kārguzārān-i ān maḥfil-i hidāyat-bunyān mi-bāshad*)」との表題を附せられ、当時のレザー廟のワクフ財の情報を提供している。本章が著された動機については、本書完成時の1883年において、著者がすべてのワクフ財に関する情報を有していないがゆえに、ワクフ財についての情報に関し、長年廟に関する大小の諸事の運営に尽力してきたムハンマド・シャフィー・カズウィーニー *Muḥammad Shafī' Qazvīnī*<sup>34)</sup> に問い合わせ、彼の返答に基づいて急ぎワクフに関する情報を挿入した [*Firdaws M*: 413-414]、とある。ゆえに、まずこの人物からの返答の文面が冒頭に記載され、その後ワクフ財のリストが続く形になっている。本史料のこのワクフ財に関する記述の箇所も、他の史料と同様に正しい運営のための情報提供に主眼が置かれて作成されたものと考えられる。

ワクフ財の情報を記す第4章のリスト部分の構成は、用途指定のワクフ財、無条件ワクフ財、諸都市におけるレザー廟のワクフ財の土地 (*amlāk-i mawqūfa-i Āstān-i Quds dar bilād*)、イラク(イラーケ・アジャム)の諸土地のワクフ財 (*mawqūfāt-i ṣafahāt-i 'Erāq*)、[本書]著者のワクフ財 (*mawqūfāt-i mu'allif*) と続き、最後に図書館所蔵の動産としてのワクフ財である書籍のリストとなっている。不動産のワクフ財の情報については、用途指定のワクフ財に関しては、原則として物件の名称と共にワクフ設定者の氏名が付される形でリスト化されている。但し、ワクフの年代に

32) 彼の詳細な経歴に関しては、*Darvishānī* [1393Kh] を参照のこと。その他の著名な著作としてはレザー廟参詣指南書である *Tuḥfat al-Raṣaviya* などが挙げられる。

33) 校訂本は他に [*Firdaws A*] も存在するが、本稿では [*Firdaws M*] を参照する。

34) この人物はハラムにて扉番を務めていた人物であり、当時のワクフ管財人アブドルワッハーブ・ハーン・アーサフアッダウラ *'Abd al-Vaḥhāb Khān Aṣaf al-Dawla* の命でワクフ関連史料を作成した経験を持つ人物である [*Ṭalā'i* 1397Kh: 132]。

については記載がない。ワクフ財の配列も地域ごとではなく、各王朝の君主がワクフ設定者となったワクフからはじまり<sup>35)</sup>、その後の配列にも規則性は見いだせないため、参照する側としては分かりにくい。また、収益の用途についてはその概略のみが記してある。

無条件ワクフ財については [Firdaws M: 423-424] に記載があるが、同ワクフ財からの収益の用途に関する言及があり、主にこのワクフ財からの収益は、廟の建物の修繕<sup>36)</sup>、従者たちや他の廟官吏の給金 (mavājib-i khuddām va sāyir-i mansūbayn-i Āstāna-i muqaddasa)、廟の装飾などに関し、ワクフ管財人の判断で使用されると述べられている。この無条件ワクフ財の収益は、個々のワクフ文書において収益の使途として指定されていないが、廟運営に不可欠な人材の人件費などの費用をある程度賄っていたとの指摘もある [Werner 2009: 184]。物件自体については、最初の数件を除き付随する説明がなく、バグ (bāgh)、カナート (qanāt)、臼 (ṭāhūna)、ハンマーム (ḥammām)、枝村につきそれぞれの名称が並べられているに過ぎない。

続く諸都市におけるレザー廟のワクフ財、イラクの諸土地のワクフ財については [Firdaws M: 424-425]、分量が多くはない。前者についてはイランのニーシャープール Nishāpūr、トルバテ・ジャーム Turbat-i Jām、トルシズ Turshīz などマシュハド近郊の都市のワクフ財が並べられているに過ぎない。また後者についてもテヘラン、セムナン Simnān、カズウィーン、イスファハー

ン、マーザンダラーン、アスタラーバード Astarābād 所在のワクフ財が挙げられているのみである。全体として情報量が少なく、不十分な情報に留まっていると言えよう。

続けて、著者によるワクフに関する情報が校訂本で2頁に渡って記される [Firdaws M: 425-427]。ワクフ財としてのマシュハドのバーザール内の店舗の業種と、収益の使途の利用法 (廟の門の所で散布する薔薇水、コーラン朗誦者への給金、ワクフ管材料 ḥaqq al-tawliya、ワクフ財の維持管理費)、ワクフ管財人職の継承法などが記載される。5軒の店舗の一部をワクフ財とする形になっており、寄進の規模としては大きいとは言いがたい。著者自身のワクフに大きな紙幅を割いて詳述した点については、自らの事績を強調する意図があったがゆえのことであろう。

最後に図書館所蔵のワクフ財としての写本のリストとなる [Firdaws M: 427-442]。同様の書籍のリストは、上述の KM, MS にも掲載されており、Firdaws の著者による新たな試みとは言えない。上記二つの史料には多くの場合において書名とワクフ設定者の名称も含む形になっている。他方、Firdaws のリストに関しては書名と冊数のみが記載されるに過ぎず、上記二つの史料と比して情報が少ない。

#### おわりに：史料としての可能性について

以上、レザー廟のワクフ財管理の歴史的な特徴とともに、カージャール朝期に作成されたワクフ関連史料6点の内容を概観してきた。

35) リストの冒頭に挙げられている君主がワクフ設定者である事例の箇所では、冒頭はこれまでと異なりナーセロディーン・シャーによる参詣者への食事の提供が記載されるが、ワクフ財の記載はない。次いでサファヴィー朝期のシャー・アッバース、タフマースプ2世、アフシャル朝期のアーディル・シャー 'Ādil Shāh ('Alī Shāh) が並ぶ。続けて、カージャール朝ムハンマド・シャーの息子でレザー廟ワクフ管財人に三度就任したムハンマド・タキー・ミールザー・ルクンアッダウラ Muḥammad Taqī Mirzā Rukn al-Dawla (1901年没)、前述のサファヴィー朝のアリー・アティーク・ムンシーが続き、その他のワクフ設定者の行ったワクフが並べられていく形になっている。

36) 先行研究における文書史料の考察においても、廟建物の修繕には無条件ワクフ財からの収益が充当されていたとの指摘がある [Nazarkarda 1395Kh: 24]。

最後に本稿で取り上げた史料の今後の研究への活用の可能性について、主要な点を簡単に指摘しておきたい。

まず、これらの史料は、過去にも言及したがワクフ財の変遷に関する研究を行う上で不可欠な史料となりうる〔杉山 2018b: 78-79〕。ワクフされた不動産がその後如何なる変化を被っていくかについては、まだまだ研究の蓄積が多くない<sup>37)</sup>。廟の運営本部やワクフ慈善機構所蔵の文書に関しては現状参照が困難であるが、廟図書館所蔵の文書は現在では一般にも利用が可能である。廟のワクフ財の変化を見ていく上で必要な証書、フクムなどが一部に存在しており、上記に見えるワクフ文書と共に活用することで、特定の廟のワクフ財の変容に関する事例研究が可能ではないかと考える。

次に、同廟の運営に関する点としては、*Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk*, KMなどを元に無条件ワクフ財、用途指定ワクフ財双方を精査することで、同廟における収入のあり方、収益の利用法などの特徴の提示が可能ではないかと考える。双方のワクフ財がどの程度の収益を廟に提供していたか、などの考察が可能であろう。また、無条件ワクフ財については Firdaws M [423-424] に人件費や修繕費などに利用されていると指摘されているが、具体的に考察した先行研究はない。例えば、病院や孤児院など同廟附設の施設の運営における無条件ワクフ財の収益の利用などを調べれば、廟運営上の特徴も垣間見えてくるように思われる。

また、カージャール朝後期のマシュハドの都市の発展に関する史料としても活用可能であろう。上述の通り *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk*, KM にはマシュハド市内のワクフ財としての商業施設の詳細なリストが付されている。同リストを用いて、マシュハドの商業施設の分布や種別などの考察に基づく当時の都市域

における商業施設のあり方や、ワクフを通じた廟と都市の商業施設の発展の相関関係などが検討可能となろう。廟図書館に所蔵される関連文書やマシュハドの古地図などを活用すれば、当時の都市の商業施設とその特徴、廟との関連について多くの知見が得られるであろう。動産のリストについても、例えば所蔵写本などは図書館の歴史の研究、さらに廟所蔵の美術的価値を持つ絨毯などの来歴の調査といった点などにも活用が可能ではないかと考えられる。

本稿で挙げた史料は、いずれも前近代の廟運営研究には不可欠な史料であり、廟所蔵の文書や年代記、その他多様な史料と組み合わせることで、多くの成果が期待できる史料であると言えることができよう。その上で、イラン地域を中心とした他の聖廟との比較を行うことで、レザー廟運営の普遍性と特徴を浮き彫りにすることが可能になろう。

## 参考文献

### ●史料●

- AQ: *Kūtābcha- 'i Marwqūfāt-i Āstān-i Quds-i Razāvī. Kitābkhāna- 'i Āstān-i Quds-i Razāvī*, Ms. 8557.
- '*Ālam-ārā* 1: Iskandar Beg Munshī. *Tārikh-i 'Ālam-ārā-yi 'Abbāsī*. Ed. Īraj Afshār. Tehran: Amīr-i Kabīr. 3<sup>rd</sup> Ed. 1382Kh.
- '*Ālam-ārā* 2: Iskandar Beg Munshī. *Tārikh-i 'Ālam-ārā-yi 'Abbāsī*. chāp-i sangī. 1319AH.
- 'Alishahī: *Ṭūmār-i 'Alishahī*, in Morikawa & Werner 2017: 8-59.
- AR: Hamadānī, Ismā'il Khān. *Āthār al-Razāvīya*, in Morikawa & Werner 2017: 1-311.
- 'Azud MKh: *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk*. Ed. Markaz-i Khurāsān-shināsī-i Āstān-i Quds-i Razāvī. Unpublished. 1379Kh.
- 'Azud AR: *Ṭūmār-i 'Azūd al-Mulk*, in Morikawa & Werner 2017: 60-126.
- DT: *Vaqfnāma- 'i Āstān-i Quds-i Razāvī*. Kitābkhāna- 'i Markazī-i Dānishgāh-i Tihārān, Ms. 2987.
- Khulāṣat*: Qummī, Qāzī Aḥmad. *Khulāṣat al-Tavārikh*. vol. 1. Ed. Iḥsān Ishrāqī. Tehran: Mu'assasa- 'i Intishārāt va Chāp-i

37) 邦文では近藤 [2007] の研究がある。

- Dānishgāh-i Tihirān. 1359Kh.
- KM: *Kitābcha-'i Mawqūfāt-i Āstān-i Quds-i Raḡavī*. Kitābkhāna-'i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, Ms. 777.
- Firdaws A: Fāzil Bastāmī, Nawrūz 'Alī. *Firdaws al-Tavārikh*. Eds. Sayyid Ḥamid Sayyidi et al. Mashhad: Bunyād-i Pazhūhish-hā-yi Islāmī. 1393Kh.
- Firdaws M: Fāzil Bastāmī, Nawrūz 'Alī. *Firdaws al-Tavārikh*. Ed. 'Alī Rizā Akramī. Tehran: Kitābkhāna, Mūza va Markaz-i Asnād-i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī. 1390Kh.
- MS: I 'timād al-Dawla, Muḥammad Ḥasan Khān. *Maṭla' al-Shams*. 3vols. Tehran: chāp-i sangī. 1301-1303AH.
- Rūznāma: 'Alī Naqī Ḥakīm al-Mamālīk. *Rūznāma-'i Safar-i Khurāsān*. Tehran: Intishārāt-i Farhang-i Irān-Zamīn, 2536sh.
- VM: *Vaqfnāma-hā wa Asnād-i Āstān-i Quds-i Raḡavī*, Kitābkhāna-'i Millī-Malik, Ms. 1137.
- 研究文献●
- Afshār, Īraj, et al. 1364Kh. *Fihrist-i Nuskhā-hā-yi Khaṭṭī-i Kitābkhāna-'i Millī-i Malik*. Vol. 4. Tehran: Kitābkhāna-'i Millī-i Malik.
- Anjabīnizhād, Rizā, et al. 1388Kh. *Bist Vaqfnāma-'i Khurāsān*. Mashhad: Bunyād-i Pazhūhish-hā-yi Islāmī.
- Furūzish, Rūhallāh. 1386Kh. *Majmū'a-'i Qawānīn wa Muqarrarāt-i Awaqāf*. Tehran: Khursandī.
- Ḥasanābādī, Abū al-Ḥasan. 1386Kh. "Nigāhī ba Asnād-i Sūrghāl dar dawra-'i Safaviya." *Ganjīna-'i Asnād* 67: 61–77.
- Iḥtishām Kaviyāniyān, Muḥammad. 1354Kh: *Shams al-Shumūs*. Mashhad: Āstān-i Quds.
- Kondo, Nobuaki. 2015. "The Shah 'Abd al-'Azim Shrine and its *Vaqf* under the Safavids." *Mapping Safavid Iran* (Nobuaki Kondo ed.), 41–65, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Mawlavī, 'Abd al-Ḥamid. 1347Kh. "Farhād gird." *Nāma-'i Āstān-i Quds*. 33–34: 120–130.
- Mawlavī, 'Abd al-Ḥamid. 1353Kh. *Pishnivīs-i Fihrist-i Mawqūfāt-i Āstān-i Quds-i Raḡavī*. Vol. 7. Kitābkhāna-'i Āstāna-'i Quds-i Raḡavī. No. 58509 [Unpublished].
- Morikawa Tomoko and Christoph Werner. 2017. *Vestiges of the Razavi Shrine: Āthār al-Raḡaviyya: A Catalogue of Endowments and Deeds to the Shrine of Imam Rīza in Mashhad*. Tokyo: The Toyo Bunko.
- Mudarrisī Ṭabāṭabā'ī, Ḥusayn. 1356Kh. "Dah Farmān Marbūṭ ba Mashhad va Āstān-i Quds-i Raḡavī." *Nāma-'i Āstān-i Quds* 38: 155–157.
- Mu'tamin, 'Alī. 1348Kh. *Rāhnāmā ya Tārīkh va Tawṣīf-i darbāra-'i Vilāyatmadār-i Raḡavī*. Mashhad: Āstāna-'i Quds-i Raḡavī.
- Muḥsinī, Zahrā. 1399Kh. "Zarīhpūsh-hā," *Dā'irat al-Ma'ārif-i Āstān-i Quds-i Raḡavī* (Gurūh-i Dā'irat al-Ma'ārif, Bunyād-i Pazhūhish-hā-'i Islāmī, ed.), Vol. 2. 91–95, Mashhad: Bunyād-i Pazhūhish-hā-yi Islāmī.
- Naqdī, Rizā. 1399Kh-a. "Kitabcha-'i Mawqūfāt-i Āstān-i Quds-i Raḡavī." *Dā'irat al-Ma'ārif-i Āstān-i Quds-i Raḡavī*, Vol. 2. 299, Mashhad: Bunyād-i Pazhūhish-hā-yi Islāmī.
- Naqdī, Rizā. 1399Kh-b. "Ṭūmār-i 'Alī Shāhī." *Dā'irat al-Ma'ārif-i Āstān-i Quds-i Raḡavī*. Vol. 2. 114–115.
- Nazarkarda, A'zam. 1395Kh. *Guzīda-'i Asnād-i Mi'mārī va Ta'mīrat-i Haram va Amākin-i Mutabarraka-'i Raḡavī*. Mashhad: Sāzmān-i Kitābkhāna-hā, Mūza-hā va Markaz-i Asnād-i Āstāna-'i Quds-i Raḡavī.
- Sayyidi, Mihdī. 1375Kh. *Tārīkh-i Shahr-i Mashhad*. Tehran: Jāmī.
- Sawhāniyān Haqīqī, Muḥammad and Rizā Naqdī. 1397Kh. *Mutavalliyān va Nā'ib al-Tawliya-hā-yi Āstān-i Quds-i Raḡavī*. Mashhad: Bunyād-i Pazhūhish-hā-yi Islāmī.
- Sūzanchī Kāshānī, 'Alī. 1399Kh. "Nā'ib al-Tawliya." *Dā'irat al-Ma'ārif-i Āstān-i Quds-i Raḡavī*. Vol. 2. 593–595.
- Ṭalā'ī, Zahrā. 1397Kh. "Siyāsāt-i Mazhabī-i Ṣafaviyān va Piyāmand-i ān bar Tawsi'a-'i Mawqūfāt-i Imām Rizā." *Faṣlnāma-'i Pazhūhish-hā-yi Tārīkhī* 37: 129–157.
- 'Utāridī, 'Azīzallāh. 1371Kh. *Tārīkh-i Āstān-i Quds-i Raḡavī*. 2vols. Tehran: 'Utārid.
- Yahyāyī, 'Alī. 1399Kh. "Azud al-Mulk, Qazvīnī, Muḥammad Ḥusayn." *Dā'irat al-Ma'ārif-i Āstān-i Quds-i Raḡavī*. Vol. 2. 133–135.
- Werner, Christoph. 2009. "Soziale Aspekte von Stiftungen zugunsten des Schreins von Imām Rizā in Mašhad, 1527–1897." *Islamische Stiftungen zwischen juristischer Norm und sozialer Praxis* (Astrid Meier, et al. eds.), 167–189, Berlin: Akademie Verlag.
- Werner, Christoph. 2016. *Vaqf en Iran: Aspects Culturels, Religieux et Sociaux*. Leuven: Peeters Press.
- Werne, Christoph. 2021. "The Razavi Sayyids of Mashhad: Families within a Family," *Families, Authority, and the Transmission of Knowledge in the Early Modern Middle East* (Christoph Werner, et al. eds.), 239–267, Turnhout: Brepols.
- 近藤信彰 2007 「ワクフと私的所有権—チャハールダフ・マアスームのワクフをめぐる」



- 『アジア経済』48-6: 9-28.
- 杉山隆一 2018a 「イマーム・レザー廟研究部門の出版物をめぐって一同廟の歴史に関する研究書の紹介」『イスラーム地域研究ジャーナル』10: 97-107.
- 杉山隆一 2018b 「書評と紹介：MORIKAWA Tomoko and Christoph WERNER (eds.), *Vestiges of the Razavi Shrine -Athar al-Razaviya: a Catalogue of Endowments and Deeds to the Shrine of Imam Riza in Mashhad*, Tokyo: The Toyo Bunko, 2017.」『イスラーム世界』90: 71-79.
- 杉山隆一 2020 「アフシャール朝期のイマーム・レザー廟—『アリー・シャーの巻物』から見る18世紀イランにおけるイマーム廟の組織と運営（I）—」『東洋文化研究所紀要』177: 139-178.
- 守川知子 1997 「サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド：一六世紀イランにおけるシーア派聖地の変容」『史林』80(2): 167-207.
- 守川知子 2006 『シーア派聖地参詣の研究』京都大学学術出版会.